

II 研究主題と主題設定の理由

1. 勝敗を素直に認め合えない。 2. 体育への意欲が低い。(学年による)
3. 表面だけで理解して、突っ込んで考えるのを嫌う。 4. 体育を単なる「遊び」と思っている。
5. 運動欲求に任せてやみくもに取り組む。 6. 多様な運動経験の不足。
7. それ以上はできないという自分へのあきらめの早さ 8. 自分ができたら、それでおしまい。
9. 仲間に教えてあげようという意識の不足。 10. H30年度からの体力の低下傾向。

今年度研究の開始にあたって、「体育科」の学習に向かう本校児童の課題は何か、先生方から回答のあったものは、上のようなものであった。

本校で行った以前の研究では、「体育知」を研究のテーマの一角に据え、特に、上記の「3. 5」のような課題の克服を目指した。

なぜかは分からないが上手くいかない時に、それとして思考せずただひたすら繰り返す生産性の無い運動・練習。

また、プライドが邪魔をして分かったふりをして友達や先生に質問をせず、やみくもにプレイする。いずれも本校児童ならではの傾向である。

しかし、これらの課題に加え、我々は別な観点で新しい課題を見出した。

「8. 自分ができたら、それでおしまい。」

「9. 仲間に教えてあげようという意識の不足。」

前年度まで「特別の教科・道徳科」を研究してきた我々である。

前年度研究主題・サブテーマでは「～友達や社会との関わりを見つめる力の育成をめざして～」を掲げていた。他者に無関心、友達に無関心、けがをしている子を見て「我関せず」の態度。頭ではどうすれば良いか分かっている、しかし行動につなげる勇気と駆け出す一歩がもう一つ足りない。他者意識と道徳的实践力という大きな課題である。前年度までも大いに着目していたテーマである。

「特別の教科・道徳」では、その道徳的实践力を養うために教材に自我関与させ、生身の自身の「心の位置」に一旦着地させ、そこから「その時あなたならどうする？」と、思考し、成長を促す手法を採った。

今年度我々は、それを体育の授業を通して解決できないかと考えた。自分の記録の伸長、自分の技能の向上、勝ち負けだけにこだわらせない。周りの仲間の成長、チームの勝利のために仲間にどう助言するか、苦手な子をどう励ますか、得意な自分がチームのためにできることは何か、体育を通して友達との関わり方を見つめ直し、学ばせていく。そのような経緯で、今年度の研究主題を以下のように設定した。

研究主題「体育的身体活動を通じた心の教育」
～よりよく自分を高め、仲間と豊かにかかわり合えることをめざして～